

これからの建築士賞

審査員からのメッセージ

審査員

遠藤 幹子 (office mikiko / 一般社団法人マザー・アーキテクチャ)

岡部 明子 (東京大学大学院新領域創成科学研究科教授)

藤原 徹平 (フジワラテッペイアーキテツラボ / NPO 法人ドリフターズインターナショナル / 横浜国立大学大学院 Y-GSA 准教授)

山崎 亮 (studio-L / 東北芸術工科大学教授、同大学芸術学部コミュニティデザイン学科学科長 / 慶應義塾大学特別招聘教授)

メッセージ

遠藤 幹子

(office mikiko / 一般社団法人マザー・アーキテクチャ)

これからの建築士賞の第一回受賞者として、この度審査員をさせて頂くことをとても嬉しく思います。

長い間、子育てと建築の仕事を両立しながら日本や途上国のコミュニティをエンパワーする活動を続けてきましたが、なかなかそれが建築論壇のメインストリームに乗らないため、ある意味一人で孤独に戦ってきたような日々でした。この賞を頂いたことで「このまま思ったとおりに仕事を開拓してゆけばいいんだ」と私自身が背中を押してもらえたことと、何より一緒に活動してきた NGO やコミュニティの方々にとっても喜んでもらったのが嬉しかったです。

皆さんもお気づきのように、テクノロジーの進化によって建築士という職能も姿を変えざるを得ない時代が来ています。建築士の一人一人がもっと広い視野で社会を見つめ、社会と共に生きながら、より良い未来を築くためにはどうやって持ち前の力を発揮し、どんな新しい動きをすべきなのか？真剣に考えることが必要になっています。ですので、建築のバックグラウンドを活かしながら、何か未来への強い信念を持って「まだ名前のついていない仕事」を果敢に開拓している方々を、私は応援したいと思います。複数の方に推薦されてようやく私も応募しようと思えたので、「まさか自分が建築賞に応募するなんて」と思う方にこそ応募頂きたいですし、そういう方が周りにいらしたら、皆様にどんどん推薦して頂きたいと思います。楽しみにお待ちしております！

岡部 明子

(東京大学大学院新領域創成科学研究科教授)

「実は私、建築士の資格を持っているんです」けれど、一見全く関係ないことで活躍している人も応募してください。そして、建築士であることがどう影響しているのか、考えてみる機会にしてほしいです。

藤原 徹平

(フジワラテッペイアーキテツラボ / NPO 法人ドリフターズインターナショナル / 横浜国立大学大学院 Y-GSA 准教授)

私が学生のころ(1990年代の後半)、「将来建築の設計の仕事なんてなくなるぞ」とオトナたちに散々脅されたが、なんのことはない今はむしろ設計業界全体は未曾有の人材不足のようだ。(私も含め知り合いの建築家たちは揃って社員募集中)。確かに新築の数は減ってるかもしれないが、社会改革のニーズは高まる一方だ。

オトナたちは「将来は建築の設計は領域が拡張するぞ、社会は変わりつつける、やるべきことは山積みだ！建築やりながら建築以外もどんどん挑戦してみる」と言うべきだった。

仕事に粘り強く、人と歴史を尊重し、数字にも法律にも強い、建築士というプロフェッショナルがカバーしなければならない領域は広がる一方だ。

山崎 亮

(studio-L / 東北芸術工科大学教授、同大学芸術学部コミュニティデザイン学科学科長 / 慶應義塾大学特別招聘教授)

建築士の仕事の重要な要素のひとつとして、社会的な課題の解決がある。建築的な手法によって課題を解決する場合、以下の2種類の取り組みが想定されよう。

- ・ 物理的な建築を設計することで社会の課題を解決する取り組み
- ・ 建築的な方法を活用して他分野の課題を解決する取り組み

個人的には、自分がこれまで取り組んできた後者のプロジェクトに興味がある。つまり、物理的な建築物を設計するのではなく、建築的な方法によって他分野の課題を解決しようとするプロジェクトである。我々が当たり前だと思っている方法のなかには、他分野(教育、福祉、医療、環境、商業、情報、防災、まちづくりなど)において重宝されるものがたくさん含まれている。その特長を活かしてさまざまな分野の課題を解決するようなプロジェクトが応募されることを期待している。